

哲学カフェ第三期

第二回 六月二十八日(日)

二時から四時まで ムーレックにて

リベラリズムの行き詰まり

「リベラルは生き残れるのだろうか」

発題者 永井良和さん から

リベラリズムという言葉は、わかりにくい、あいまいな言葉ですが、そのわりには、新聞などには、よく出てきます。特に目立つのは、「保守かりベラルか」といった使い方でしょうか。

アメリカやヨーロッパをはじめとする西洋近代国家や近代社会は、基本的にリベラリズムの考え方をベースにして発展してきたと考えられます。

しかし、アメリカのトランプ現象、ヨーロッパにおける移民排斥を訴える右翼政党の台頭などに見られるように、このようなリベラリズムの考え方に対する批判や攻撃が、激しくなっています。日本でも、「リベラルの退潮」といった言葉がよく語られます。

なぜ、リベラリズムがこのような批判を受けるのか？

いわゆる「反知性主義」と呼ばれるような潮流によるばかりだ批判だとするだけで、かたづけてしまっていないのでしょうか？

今回は、少していねいに、「リベラリズム」という考え方のポイントはどこにあるのか？ということ。また、テレビの「サンデルの白熱教室」で一時話題になった「コミュニケーションズ」(これもわかりにくい言葉ですが)による「リベラリズム」の批判をとりあげ、「リベラリズム」の考え方には、本当に問題はなののか？ということ。この二つについて、考えてみたいと思います。

これらの問題は、別に専門的な知識がなければ、考えられないような問題ではなく、私たちが人間というものをどう理解するのか、倫理や道徳というものをどう考えるのか、など、私たち一人ひとりが、きつと自分なりに持っている考え方をともに、話し合っていくしかないことがらだと思っています。必ずしも、正しい結論がひとつだとは、思いません。いろんな方のご意見が聞けたらなあと思っています。



第一回 見える世界 見えない世界 の感想

まずは光島さんから

二つのミニワークショップを交えながらお話しさせてもらいました。

一つは、『京阪天満橋』と言う立体コピーで作ったさわる絵です。もう20年近く前に描いたものですが、なぜかアイマスクをして、言葉で道案内をしながらさわってもらおうと指先でおもしろい経験ができる絵です。

二つ目は準備してもらった写真を見ながら、その雰囲気や言葉でよくに伝えてもらうという鑑賞の試みでした。いつも見える人と見えない人が美術館に行ったら、絵の前にして言葉で鑑賞しているのを哲学カフェでやってみたというわけです。「見るトーク」と言うような呼び方で行なわれている場合もあるようです。

一枚目の写真は、沖繩の祭りでした。ぼくが苦手と感じているからか、うまく言葉のリズムに乗りきれませんでした。写されている風景を、写真的に説明しようとするあまり、ぼくの気持ちに飛び込んでくるような言葉を引き出せませんでした。

二枚目は、動物の頭と人間の手が数本写っている神秘的な写真でした。これは、いろんなことが想像できるタイプの映像のようで、言葉もいろんな角度から語られ、ぼくが割り込んでいく隙間もありました。いろんな風に解釈できたり、抽象的だったりするものは言葉が活発に飛び交って、ぼくの頭の中もどんどん活性化していくように思いました。

たぶんぼくが作っている作品においても、未完成な部分があったり、いろんな情報をパラレルにまとめきれない状態で表現していないとおもしろさが半減して

しまうのだと感じています。そういうことを考えながら、最近制作している表面を布で覆った作品を最後にさわってもらいました。タイトルは、『さわってはいけないもの』です。

どうでしょう。まだまだかな？

そして参加者の皆さんから

「家にいる時は、不自由？というか障害を感じないけど外に出ると感じる…」というのは、たぶんいろんな立場の人も（女性であるとか）感じる事で、それはきっと世の中が多数派の考えや見方ですんでいるからだろうな、と思います。ずっと美術に関わってききましたが、見えない世界から表現した芸術にふれることができて、今日は大変よかったです。光島さんからみた世界がピュラーになっていくと、より豊かな世の中になるような…。

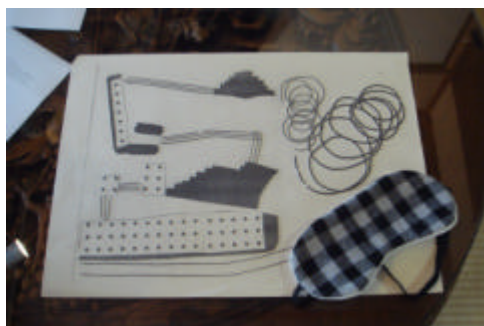
光島さんが作られた『京阪天満橋』の絵(?)はおもしろかったです。触りながら、空間をイメージすることで少し光島さんが感じられている空間の姿と、逆にその世界を二次元化することによって統合しようとする、ある種の「視覚の世界」を感じることができました。私たち晴眼者の視覚の世界と、光島さんが生きられている立体&触覚の世界とさらにそれを補って「視覚化」(統合「みれたす」)しようとする世界の重なりとズレに、改めて関心をひかれました。

去年高井さんから「聴こえる/聴こえない」がグライダーシヨンのであることを教えてもらいました。こゝんでは「見える/見えない」でした。二枚の写真を光島さんに「言葉で伝える」ワークショップをしました。

普段は見過ぎてしまっているだろう人物の細かい表情やこころのありようまでも「見えた」ような気がしました。見える人&見えない人のコラボレーションでした。哲学の「対話」がここにあるように感じました。今日は貴重なお話しをありがとうございました。自分は今、障がいの有無に関わらず行ける塾をやりたいと思っています。そんな中で自分以外の障がいについて学びたいと思っているところに、光島さんのお話しを聞くことができ、勉強になりました。失礼ながら、視覚障がい者とアートの組み合わせが意外であり、面白かったです。あと、教師を諦めて、鍼灸師の道を選ばれた経緯を伺いたいと思いました。

体の特徴や取り巻く環境の違い、その人を作ってきた過去ももちろん違う者達が一つの投げられたテーマを元に目に見えるもの指で感じるものを描写すると同時に更にその奥を見つめ自分を掘り下げて 相手に伝

アイマスクと作品『京阪 天満橋』(左)とアイマスクをつけて作品に触れてみる参加者の皆さん



わるように言葉で紡ぐ時間であったように思う。自分の存在をボールとして投げてくださいました光島さん、生きた問答をありがとうございました。また共に時間を過ごした仲間たちの様々な何気ない発言や気付きに自身の中にある様々なことと重ね合わせ思考させてくれる機会となりました。家で猫と寝て過ごすのも悪くはないですがこういう時間も大切だな〜としみじみ思う次第です。みなさん、ありがとうございました！またお会いしましょう！

まず斯様な魅力的な方々と出遭い大切なお話の数々を共有できる素敵な場をくださったこと本当にありがとうございました。日頃、社会の求めるスピードにとり残されてゆっくり考えることも難しいうえに、何がどう変化していくのか理解することも容易でないこの世の中で、身近にこのように立ち止まって皆で考えることのできる場があるというのは、この上なく重要なことであると思います！光島さんとの交歓のセッション、その温かくユーモラスな人柄に触れられてとても嬉しく、とても楽しく参加させていただきました。何ももって「健常」とするのか。私たちが「あたり前」に知覚していることがどれだけ「あたり前」なのか？ 普段「見て」いる世界がゆさぶられました。写真をとるに見るプロセスがとりわけ面白かったです。「見る」ということを光島さんに伝えていようという行為がどれくらい不確かなものなのか、悟り下さっているようにも感じました。あと、思った以上に全盲であっても同じ世界を共有していることの実感を確かめあえるのだと学ばせていただきました。素敵な時間を本当にありがとうございました。次回も楽しみにいたしております。